

第12回 戦国時代

最近、「歴女」なる、歴史好きの女性が増えているそうです。戦国武将や幕末の志士たちに共感し、ファンとして、歴史書を読むそうです。そういう歴史への接し方ももちろんアリですが、現実には、そんなカッコ良さだけではとらえられません。男の子はゲームの「信長の野望」でしょうか？実際、「先生、こういう奴ホンマにおったん？」って聞かれたこともあります。現実と物語やゲームの世界は大きな隔たりがあります。世界史でいえば、横山光輝の『三国志』ですか。漫画もゲームも小説も否定しませんし、楽しんでもらえたらいいのですが、今述べたように、史実と物語には開きがあり、歴史学では、長年、歴史をどう描く（記す）のか、という問題が入ってきます。ともかく、楽しくておもしろいだけではないということなのです。

1. 室町幕府の解体

相次ぐ一揆、応仁・文明の乱で下剋上の風潮は広まっていった。乱後の幕府で10代将軍よしなね義植から最後の将軍義昭に至る6人の将軍のうち、京都で没したのは家臣に攻められ自殺した13代将軍義輝一人だけで、いずれも他は京都を追われるという状態だった。しかも、幕府の実権は管領細川氏が握っていた。しかし、細川氏じゃ家臣の三好長慶によって倒され、三好氏も松永久秀が倒すという状況であった、この松永久秀が1565年、13代将軍義輝を殺害し、東大寺大仏殿を平重衡について焼き払ったのであった。

2. 守護大名と戦国大名

幕府中枢部の完全なマヒないし消滅状態の中で、自立的な地方権力として戦国大名が台頭してくる。ここではまず、従来の守護大名と戦国大名との相違を明らかにしておきたい。それは、①守護大名が、将軍から任命され、幕府に依存しているのに対し、戦国大名は、実力でその地位を奪い取った者がほとんどで、幕府から独立していること。②守護大名が三管領・四職などを中心に、京都に居住し、領国には守護代を送ることが多いのに比べ、戦国大名は、国内に住み、家臣を城下町に集住させている。③荘園・公領制に寄生し、一円支配が不徹底であった守護大名に対し、戦国大名は、領内の土地台帳を提出させ（指出）、荘園制を否定し、土地・人民を直接支配していること。④守護大名は、国人らを家臣とするが、主従関係は緩やかで、家臣の所領給与はほとんどないが、戦国大名は、強固な主従関係を持ち、家臣への所領給与を行い、給人とした。⑤領国の政治・経済を完全に掌握できない守護大名に対し、戦国大名は分国法を制定し、楽市令などを発し、国内の政治・経済を掌握している。このような戦国大名の支配領域を分国とよぶ。これまで、院分国や関東御分国という用語を用いてきたように、分国とは、中央権力から相対的に分離・独立し

た地域という意味で使用されている。

3. 戦国大名の出身

戦国大名の出自であるが、大別して4つに分けられる。まず、①国人などから。このグループには伊達（陸奥）、浅井（近江）、毛利（安芸）、長曾我部（土佐）などがある。②守護代から。上杉（越後）、織田（尾張）、朝倉（越前）、尼子（出雲）である。③守護大名から。このグループが最も少ないが、武田（甲斐）、今川（駿河）、大友（豊後）、島津（薩摩）がいる。これら以外に出自がわかっていないグループがある。

◆従来、この出自不明のグループに北条早雲や斎藤道三らがいたが、北条早雲は、室町幕府政所執事伊勢氏の一族で、将軍義尚の申次として活躍していた伊勢盛時であることが確認され、斎藤道三も土岐氏の三奉行とよばれる代表的な家臣の一人であった長井新左衛門尉の子であることが判明している。

4. 群雄割拠・下剋上

関東では、鎌倉公方・関東管領の分裂が生じた。永享の乱後しばらく空位だった鎌倉公方には足利持氏の子、^{しばうじ}成氏が就任した。しかし、成氏は、関東管領上杉氏と対立して、下総の古河に逃れた。古河公方のはじまりである。これに対して将軍義政は弟政知を1457年、鎌倉公方に任命したが、政知は伊豆堀越に止まり、鎌倉府は古河公方と堀越公方に分裂した。1491年、政知が亡くなり、この地方で勢力をもってきた北条早雲が政知の子茶々丸を殺害したことで堀越公方は滅びた。古河公方も、1554年、北条氏によって滅ぼされ、鎌倉府は消滅した。

一方、鎌倉公方を補佐する関東管領上杉氏も同様に分裂していった。上杉氏は居住する場所によって4家に分かれていたが、そのうち2家は早くから衰退し、^{おうぎがやつ}扇谷上杉と^{やまのうち}山内上杉の2家が勢力を持ち、交互に関東管領になってきた。しかし、15世紀後半に扇谷上杉から太田道灌が出て力を持つと、山内家がこれを抑えるために道灌を殺し、両家是对立するようになった。さらに、北条氏がこの地で台頭しはじめ、両家は協力して戦ったが、抑えることができず、まず、扇谷上杉が1588年、北条氏に打倒され、山内上杉も越後の家臣長尾景虎を頼って越後に下り、長尾景虎に家督を譲った。この長尾景虎が上杉謙信を名乗ることになる。

北条氏は、関東地方で勢力を広げ、北条早雲→氏綱→氏康の3代で関東一帯の支配を行った。甲信越地方では、甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信の川中島の戦いが有名である。中部地方では、畿内と地理的に近く、濃尾平野の生産力を背景に、有力な戦国大名が多数いた。駿河の今川義元、越後の朝倉氏、尾張の織田信長などである。

近畿地方では勢力を弱めたとはいえ、未だ幕府が存在し、一揆がくり広げられていたた

めに近江の六角氏が知られている位である。中国地方では、大内義隆が家臣の陶晴賢すえはるたかによって滅亡し、陶氏が毛利元就によって打倒された。四国地方では、土佐の長曾我部元親が勢力を有していた。九州地方では、北部では少弐氏から独立した龍造寺氏が力を持ち、豊後には大友氏が、南部には薩摩の島津氏がいた。東北地方は、伊達氏が勢力を持っていた。

3. 戦国大名の支配

戦国大名は、惣村を直接支配し、分国の支配を行った。軍事力を強化するために、家臣団の編成には気を配り、主君との血縁関係の有無や服従の時期によって一族衆・国衆・新参衆などに分けて、いずれも土地を給与として与えた。また、**貫高制**を基礎に軍役を負担させていった。軍事面で特徴的なのは、**寄親・寄子制**とよばれるものである。有力家臣を寄親とし、これに下級武士を「子」の形で預け、その指揮と保護を委ねる組の仕組みを作った。

戦国大名の政治は、富国強兵を統治の根本とするやり方であった。特に分国法がその中心になっている。この法の共通点は、私的同盟（婚姻）の禁止、分割相続の禁止、喧嘩両成敗などの家臣団統制、年貢納入や逃散禁止などの農村対策の項目があった、例えば、「朝倉敏景十七箇条」には、重臣層の築城禁止と城下町一乗谷への移住を規定している。その意図は、もし重臣層が謀反を企てるとすれば、その所領で武器・兵士。食料を調達し、領内に砦を築くだろうから、築城の禁止は謀反の防止策となる。また、城下町への集住は、家臣を伝来の所領から引き離し、農村には農民だけにして、農民から直接に年貢を取ることとするという近世につながる農民支配政策、**兵農分離**が目的だったのである。

さらに、分国の経済発展と支配のため、指出検地を実施し、国内に分散していた商工業者を城下町に集め、軍事力に必要な物資の生産・調達を行った。交通の整備もあわせて行い、関所の廃止、市場開設（楽市）も行い、商業取引の円滑化を図った。鉱山の開発や河川の改良も行っている。なかでも、釜無川と御勅使川の合流点に作られた信玄堤のような整備が知られている。

◆戦国時代には、名主・百姓が大名や国人領主と主従関係を結び、苗字を与えられ、侍身分を獲得する者が現れた。これを**地侍**という。彼らは一度侍身分を家として獲得すると、主従関係が絶たれ、百姓に戻っても「凡下」ではなく、侍身分の家として存続した。戦国大名は、この地侍を大名と主従関係を保ち、軍役を務める家中の武士に限定していく。そして、軍役体制のもとで、軍役を負担する兵と位置づけられ、侍身分を獲得しながらもお、地頭に年貢・公事を納入する百姓でもあるという地侍こそが、戦国大名の軍事力の中心であった。それ故、戦国大名は、彼らを通していかに郷村を把握するかがキーポイントになった。

◆貫高制

代銭納を現実に反映したものではない。また、検地以後の代銭納を目的としたものでもない。大名が一定の統一基準に従い定めた基準値であり、大名が収入を貨幣の持つ基準機能を利用して統一的に把握しようとしたものである。

◆中世の荘園・公領制のもとでは、領主に対して年貢。公事を負担する者が百姓とよばれていた、つまり、凡下である農民・漁民・職人などはもちろん、下人も侍もその限りで百姓であった。だから、百姓とは身分ではなく、総称であった。

4. ヨーロッパ人の来航

(前の、室町時代の外交でも書きましたが、日本史では、このあたりのところは、「ある日突然、スペイン人・ポルトガル人がやってきました～！」っていう風に受け取られてしまうのですね。本当は、世界史のダイナミズムみたいなどの説明が必要だ、と教師はある程度理解していても、「**時間がない！！**」という理由で、ある日突然やってきたみたいな説明になってしまいます。「世界史でやっただろ」、「中学の歴史分野でやっただろ」というのは言い逃れにしか過ぎません。中学の歴史分野では、現行指導要領では、世界史については、ほとんど説明しなくて良いことになっています。だから、生徒たちはほとんど知らないと言っても良いでしょう。世界史で習ったと言っても、例えば、世界史 A を選択していたらどうでしょう？この辺の問題がいつも残るところです。一方、世界史の方では、「大航海時代」は、近代への入り口で丁寧な説明が求められています。久しぶりに世界史の教科書を読んでみて、びっくりしてしまいました。ウォーラシュティンの「近代世界システム」が普通に説明されているのですから。＜このあたりの社会科学の用語が理解できない日本史教員は、やはり学習不足でしょう。せめて世界史の基本タームくらいの学習は、教師はすべきだと思います。＞)

◆世界史の視点から(2)「大航海時代」

室町時代の外交について、同様に記した通り、日本を取り巻く国々との外交は、ある日突然はじまったわけではない。「大航海時代」もある日突然、スペインやポルトガルが開始したものではなかった。

すでに簡単に記したように、アジアでは日本・明・朝鮮・琉球が結ばれて、海上交易ルートができていた。海の道(マリンルート)は、地球規模で商品を輸送するルートであり、それは当然、ヨーロッパともつながることとなる。11世紀頃、西ヨーロッパでは都市経済が発達し、イタリア商人が地中海での交易に参加しはじめる。また、同じ頃、イスラーム教の広がりに対し、**十字軍**が派遣されることとなる。十字軍派遣は、聖地エルサレムの奪還を目指すためのものであったが、国を超えての軍の移動であり、折からの封建社会の安定に伴う中世都市の繁栄により、大規模な交易が開始されることとなった。断続的に続

けられた十字軍遠征の時期に、地中海での交易・文化交流は活発化していく。イスラーム世界の知識・技術がもたらされたし、彼らが中国から学んだ製紙法・羅針盤・火薬もヨーロッパに入っていった。

このように、中世ヨーロッパは、イスラーム世界との対立・交流、都市の発展、経済発展がかなりダイナミックに進んでいた。(その点で、その昔、ヨーロッパ中世のところを教えていた世界史の先生方に、「暗黒の中世を教えているのか」とつまらないギャグを言った自分が恥ずかしい(笑・泣)。まったく「暗黒」どころか、無茶苦茶ダイナミックな動きやん！さらに、最近思うのですが、世界史や世界の動きをある程度きちんと理解するためには、イスラーム教なるものを理解しないと無理なようにも思えます。これは何も、2001年の9月11日以降のことから記しているのではなく、私のような日本人なる人々にとって、イスラーム教あるいは、イスラーム世界というものは、遠〜い存在のようで、あまりきちんと学んだことがないように思われるのです。ところが、ムスリム商人たちは、どんどん世界に乗り出していくわけですよね。あの原動力は何？とか、もっと根本的にイスラーム教って？？？ということの世界史で丁寧習ったように思えないのですが。私の勉強不足を十分・十二分に認めた上で、一度勉強したいテーマです。)

こうした動きをその土台として、「大航海時代」ははじまっていく。直接のきっかけは、**香辛料**(spices)を求めてである。肉食の広がりや、香辛料、なかでもコショウ(胡椒)が必要とされた。世界史では、11世紀のヨーロッパでは、胡椒は1粒ずつ数えられ、銀の目方と同等に扱われたことを学ぶ。第2に、十字軍遠征をきっかけに、**東方への関心**が高まったこと。例のマルコ=ポーロの『世界の記述』(『東方見聞録』)による「黄金の島・日本」の紹介である。第3に、イスラーム教に対する対立。スペインもポルトガルも、長い間イスラーム教徒により支配されていた。両国ともイスラーム勢力を駆逐するためレコンキスタ(国土回復運動)を11世紀頃から開始している(後述)。第4に**羅針盤**の実用化と造船技術の発達。ルネサンスの影響は「大航海時代」を側面から援助したことになる。

ポルトガルは、13世紀半ばにレコンキスタを完成し、海外進出をはじめていく。もともと、イベリア半島の西部にあるこの国は、大西洋に面し、土地は狭く、豊かな国ではなかった。そのため、貿易が必要で王室が率先して、これを推進した。詳細は省くが、ポルトガルは15世紀に入り、アフリカ西岸を占領し、1488年にはアフリカ南端の喜望峰に到達する。1498年には、ヴァスコ=ダ=ガマが喜望峰周りでインドのカリカットに到着した。その後、1511年にマラッカを占領する。

スペインは、1479年、カステリアとアラゴンの2国が統合し誕生した国である。コロンブス(イタリア生まれのジェノバの船乗りって世界史ではオマケがつくのです。正誤問題かな?)は、女王イザベルの援助を受け、1492年大西洋を渡り、アメリカに到達する。次に、ポルトガル人のマゼラン(マガリャンイス)が、1519年、世界周航を国王の援助のもとで開始した。マゼランは、途中セブ島で島民により殺害されたが、船員たちは航海を続け、1522年に帰国した。スペイン・ポルトガル両国の世界への展開は、以上のようなこ

とである。

スペイン・ポルトガルの新航路開拓で、16世紀には世界の一体化がはじまる。この時期の遠隔地貿易の拡大を支えたものは銀である。日本で産出された銀もこれと関係する。日本の銀は、中国に流れ込むこととなった。一方、スペインが植民地にしたラテンアメリカで産出された銀は、スペイン経由でヨーロッパに持ち込まれた。また、中国で生産された生糸はポルトガル船によって長崎に運ばれ、日本の銀を中国に運ぶ貿易で収入を得た。こうしたポルトガルの動き（アジア貿易への参入）が日本に鉄砲をもたらす契機となったのである。

◆世界史の視点から（3）「キリスト教の伝来」に関して

あともう一つ、キリスト教（カトリック）の伝来がある。こちらは、世界史では宗教改革運動の展開を詳しく学び、その結果劣勢に立たされたカトリック側が宗教改革に対する内部改革（反宗教改革）を通じて、新教（プロテスタント）の勢力拡大に対抗すると同時に、アメリカ大陸やアジアへ新たな教線を拡大しようとしたことが説明される。特に、日本には1534年イグナティウス＝ロヨラとその同志により結成された新しい修道会であるイエズス会が直接布教の地としてフランシスコ＝ザビエルを送ったことが注目されるべきであろう。

15～16世紀にかけてヨーロッパでは、ルネサンスと宗教改革を経て、近代社会に入りつつあった。また、「大航海時代」とよばれる時代を切り開いたスペインとポルトガルは、アジアへの進出を開始した。スペインは、当初、日本にあまり関心を示さなかったのに比べ、ポルトガルは、日本が中国産生糸を求めていることに注目し、これを日本に運び、かわりに日本の銀を中国にもたらすことで利益を得た。

1543年、ポルトガル人が乗った倭寇王王直の船が種子島に漂着した。おそらく密貿易のために寧波に向かったが暴風雨にあい漂着したと考えられる。島主の種子島時堯^{ときたか}は、ポルトガル人から鉄砲を買い求めた。この頃、紀州根来寺の使者が種子島を訪れ時堯が購入した鉄砲1挺を譲り受けた。また、堺の商人橋屋又三郎も種子島を訪れ、鉄砲の製法を学んだ。さらに、近江国友の鍛冶は、島津氏を通じ将軍に献上された鉄砲をもとにして、その製作に成功した。こうしたことから、根来・堺・近江国友で鉄砲が作られることになり、戦国大名の戦術と築城術が大きく変化することとなる。

◆倭寇王王直

倭寇だから海賊で、そのボスとくれば、ダーティなイメージがするが、そうとばかりはいえない人でもあった。王直は、1540年頃から、硝石・硫黄・生糸・綿などを持ち、東南アジアに進出し、巨額の富を得た。当時、中国は海禁（貿易統制）政策を実施しており、私貿易・密貿易を行う者を厳しく取り締まったので、中国にいることは危険であった。そ

ここで、彼は平戸や五島列島に館を構えた。戦国大名とも交流があったようで、大内義隆は、王直を「五峯先生」とよび教養人として接していたようである。

5. 南蛮貿易

種子島漂着以後、ポルトガル船は九州各地に来航するようになり、スペインも 1584 年には平戸に来航した。特にポルトガルは、勘合貿易の衰退に代わり、日本との貿易を重視した。貿易方法は、日本の銀と中国の生糸・絹織物を売買する中継貿易であった。貿易港は、九州の坊津・平戸・長崎などであった。

6. キリスト教の伝来

ヨーロッパではじまった宗教改革に対し、カトリックの側では、反宗教改革が行われた。この運動の中で、イグナティウス＝ロヨラは 1534 年、同志たちとイエズス会結成する。日本へのキリスト教伝来は、イエズス会のフランシスコ＝ザビエルがマラッカで偶然あった日本人青年アンジローの案内で鹿児島に来航したのが最初である。

ザビエルは、島津氏の許可を得て鹿児島で布教をはじめた。しかし、領内の僧侶が反対したため、布教は禁止され、1550 年、平戸・山口を経て京都に向かった。京都で将軍と面会し、布教の許可を得ようと計画したが、面会できず、平戸に戻った。1551 年、ザビエルは再び山口を訪れ、領主大友義隆の保護を受けて布教を行い、同年 9 月には、大友宗麟（義鎮）の保護で豊後府内でも布教し、11 月にはインドに戻った。ザビエルと共に来日したコスモ＝デ＝トルレスはその後にも日本に止まり、山口に教会（大道寺）を建て、肥前の大村純忠を入信させた。

これ以降宣教師の来日が相次ぐ。1556 年にはガスパル＝ヴィレラが来日し、堺から京都にかけて布教を行い、将軍義輝の許可を得た。『耶蘇会士日本通信』には、自治都市堺の様子が記されている。

1563 年には、ルイス＝フロイスが来日し、織田信長の許可を得て布教した。彼の『日本史』には当時の日本のことが詳しく記されている。1570 年来日したオルガンティノも京都に南蛮寺を、安土にセミナリオ（神学校）を建てた。こうした熱心な布教によって 1579 年には信者は約 10 万人に増えていった。その中には、大友義鎮・大村純忠・有馬晴信・小西行長・高山右近といったキリシタン大名もいた。

日本への布教で忘れてはならない人物は、アレッサンドロ＝ヴァリニャーニである。彼は、信長から布教を許された後、有馬・安土にセミナリオを、豊後府内にコレジオ（宣教師養成の大学）を設けた。また、キリシタン版（天草版）の出版も行った。

ヴァリニャーニが帰国する際、キリシタン大名の大友義鎮・大村純忠・有馬晴信に働きかけ、伊東マンショ・千々石ミゲル・中浦ジュリアン・原マルチノの 4 人を伴い、天正遣

欧使節を派遣した。彼らは1585年、ローマに到着し、ローマ教皇に面会した。1590年、彼らはヴァリニャーニと帰国したが、その後出された禁教令によって信仰を放棄したり、殉教したり、国外に追放されたりしている。